『比較民俗研究』9．1994／3

研究ノート

香港海陸豊福佬人の功徳儀礼
—「過橋」儀礼を中心に—

志賀　市子※

1．はじめに

喪葬儀礼にはその文化のもつ死に対する観念が反映されている。死に対する観念とは，たとえば，死後の世界や，霊魂のゆくえについての考え方である。本稿では，中国人の冥界観を知るための手がかりとして中国の喪葬儀礼を取り上げる。

中国の喪葬儀礼は大きく殯葬，功徳の儀礼に分けられる。殯葬とは死者を入棺し埋葬するまでの儀礼，功徳とは打齋とも呼ばれ，埋葬の前後に行われる追善供養儀礼である。本稿では特に功徳の儀礼について取り上げる。功徳は，地獄に落ちた死者の霊魂を超度し，極楽世界へ往生させてやるための儀礼である。そこでは死者がめぐる冥界の様子が描かれ，救済のドラマが演じられる。

筆者は香港滞在中[1]何度か功徳儀礼を見る機会を得た。香港の道教儀礼については大淵忍爾氏が『中国人の宗教儀礼』（福武書店，1983年）の中で詳細な報告を行っておられるが，エスニック・グループ[2]ごとに特色をもつ香港の功徳儀礼に関する資料は十分とは言えない。そこで今回はその予備報告と資料紹介を目的として，香港に居住する広東省海豊，陸豊両県出身の閩南方言を話す福佬人を対象とし，彼らの中で行われている功徳儀礼を取り上げてみたい。

2．香港の功徳儀礼の概要

香港の人口の大部分は，中華人民共和国成立以降，あるいは文化大革命以降中国大陸から難民として入境し，そのまま定着した人々である。中国人には「落葉帰根」（生まれた場所に帰る）という考え方が強く，死後は自分の出身地の村に埋葬され，やがて一族の祠堂に位牌を祀られることを理想とする。しかし社会主義中国を脱出して香港にたどりついた多くの難民たちは，香港に根をおろし，香港を終の住家として生活していかなければならず，死者が出れば香港の地に埋葬せざるを得なかった。香港の喪葬儀礼がエスニック・グループごとに特色を維持し続けているのは，せめて故郷の言葉と故郷のやりかたで死者を弔ってやりたいという遺族の心遣いと，エスニック・グループごとに互助のネットワークが発達していることの現れではないかと思われる。

香港の功徳儀礼は，「喃嘸佬」と呼ばれる職業道士によって行われるものと，扶乩を行う新興の民衆道教教団のメンバーによって行われるもの，仏教教団の僧や尼姑によって行われるものとがある。

このうち職業道士は民系別に広府（広州・南海・番禺）四邑（台山，開平，恩平，鶴山），清遠，潮州，客家，そして本稿が取り上げる海陸豊（福佬）の6つに分けられるとされ，それぞれその地域独特の儀礼を得意とする専門の道士（法師）たちがいる[3]。このうち広府，四邑，清遠の職業道士は，「本地」（地元）の「喃嘸佬」と見なされ，道教的色彩が強い。潮州系は，祀っている神仏，衣装，経典等の面で仏教的色彩が強く，海陸豊，客家の場合は道教的部分と仏教的部分が混淆している。

都市化の進む香港では，寺廟の祭礼，盂蘭盆会などの民俗宗教を支えるコミュニティが解体し，伝統儀礼はおおむね簡略化・衰退の傾向にあるが，喪葬儀礼も同様の傾向が見られる。都市生活者である遺族の都合に合わせて儀礼のスケジュールを組むことと，街中の殯儀館の一室を借りて行われることが多いため，殯儀館の規定に従って午

※筑波大学歴史・人類学研究科

後から夜11時までに功徳を終わらせ，家族はいったん家に帰り，次の日の朝に出棺の儀礼を行うというのが普通である。夜中の使用が認められている葬儀場では，明け方まで功徳を行うところもある。あるいは，功徳は殯葬儀礼をすべて済ませてから，位牌や骨壷を安置する寺廟や宗教団体[4]で別に行うこともある。この場合も午後から夜にかけて，だいたい半日というのが一般的である。かつてはよく行われたと言う三昼夜の大掛かりな功徳は今ではほとんど行われないという。

3．福佬人エスニック・グループの概要と儀礼の担い手

田中一成氏によれば，福佬人の広東省海陸豊地区から香港への移住の時期は，三期に分けられるという。第一期は明末清初から清代中葉にかけて，海豊陸豊の沿海漁民が港九新界沿海部の浅海漁場を開拓し定着した。定着区域は香港仔，長州島，坪州，九龍半島東岸元洲仔などであった。第二期は香港開港から第二次世界大戦終了までの時期で，港湾労働の苦力，車ひきなどの労働者として市街地に移住定着した。第三期は第二次世界大戦終了後から現在までで，中華人民共和国成立後，海陸豊県から難民として入ってきた福佬人は，最初山腹の難民小屋に住んでいたが，後に政府が建てた高層住宅に移り住んだ。居住地は秀茂坪，竹園，藍田，石籬等の公団住宅地区に集中し，付近には彼らの故郷の郷村の廟神を祀る廟が点在する，福佬人のコミュニティが形成されている[5]。以上の福佬人の香港への定着過程から見て分かる通り，初期の移住民は主に，蜑家とはまた別の水上居民であった。本稿で紹介するのは，この水上居民の福佬人の事例である。

福佬人の宗教儀礼を担当する職能者集団には，現在「劉氏通真壇」，「邱氏広勝祖壇」「魏氏広徳祖壇」の三つがある。職能者集団といっても恒久的な集団組織を作っているわけではなく，法事を請負った壇の老板（親方）が，馴染みの法師や楽師に連絡を取って人を集めるというしくみになっている。集められた法師は必ずしもその壇の所属というわけではなく，頼まれればあちこちの壇に行って仕事をする。

これらの壇は，功徳儀礼だけでなく，廟の神誕祭祀や醮祭の儀礼も担当する[6]。法師の中には，福佬劇の役者だった人も少なくない。功徳儀礼の中で，「唱曲」といって海陸豊白字戯[7]の一節が唱われることもあり，功徳儀礼と祭祀演劇とは密接な関係をもつ。

4．儀礼のあらまし

ここでは，1992年10月７日から８日（新暦）にかけて筆者が見学した「邱氏広勝祖壇」の功徳儀礼について，そのあらましを述べていこう。

儀礼の場となったのは，九広鉄道の大埔駅に近い林村河岸で，仮設テントを張り，その中に祖師を祀る法壇と，遺影や位牌を置く霊壇とが設置された（図１）。棺は儀礼の始まる直前に運び込まれた。

法壇に祀られる画像の名称は，儀礼を担当した邱氏広勝祖壇の老板の話によれば，図２の通りである[8]。画像の前に置かれた香炉には米を入れる。

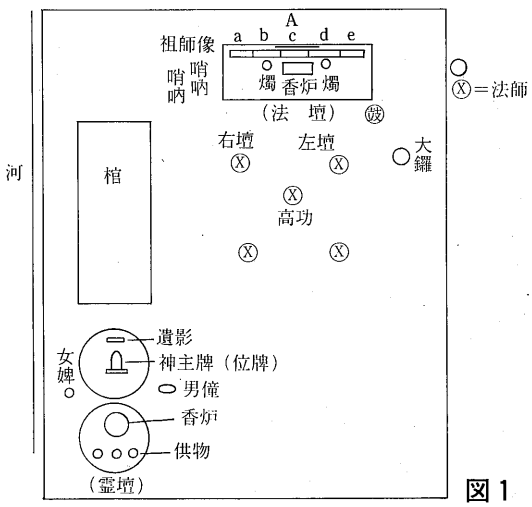

図１

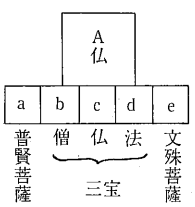

図２

法器や楽器は海陸豊方言の独特の名前で呼ばれており，漢字表記できない物も多い。たとえば，嗩吶は cheui di da（吹□□），あるいは高功にあたる法師が手に吊り下げ，右手でへらの様な竹製のばちをもって音を出す小鑼は広東語音で heung jeung と呼び，漢字では响仗をあてていた。この他鼓を鳴らしながら拍子をとる時に鳴らす木製の打楽器を响板，あるいは鼓頭と呼んでいた。

死者は62才の女性で，沙田在住の元水上居民である。旧暦九月九日に亡くなり，功徳儀礼が行われたのは十三日であった。功徳儀礼の次の日，十四日の午前中に出棺し，火葬に付された。大埔や沙田近辺に定着した元水上居民の葬儀は，よくこの林村河の岸が使用される。水上居民の功徳は，福佬人の一般の功徳と比べて細かな差異があるという。たとえば，死者の男兄弟，すなわち死者の息子の舅父（母方のオジ）が葬儀場に入ってきた時には，息子夫婦は地面を這い礼を尽くして出迎えなければならないとする習慣とか，孝子が布の帽子ではなく竹と麻紐と白布でつくった孝帽（図３）を被ることなどである。

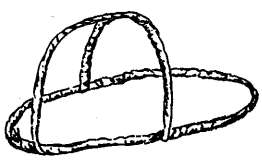

図３

「本地」（広東系）の「喃嘸佬」の功徳では，紙製の仮の位牌が用いられるが，福佬人の場合は，位牌（神主牌）は木製で赤く塗られ，「顕妣諡慈淑Ｘ氏ＸＸ之神主」と墨で書かれている。この位牌は火葬の際に棺とともに焼く。

次に功徳儀礼の過程を科目ごとに順を追って述べていこう。15時55分に棺が運びこまれ，ひとしきり「打排子」[10]を行った後，16時30分頃から儀礼が開始された。

①「請祖師」神仏に来臨を請い迎える儀礼である。まず嗩吶と太鼓の乱打と共に五人の法師が法壇に向かって左側から一人ずつ順番に法壇の前の空間に入場する。高功を中心として四角形に並び，法壇に向かって神仏を請う経文を独特の節回しで唱和する。法師たちはそれぞれ高功が响仗，右壇が木魚，左壇が小鈸，その後ろは揺鈴を持つ。その他の楽器は，拍子をとる太鼓，低胡，嗩吶，大鑼である。衣装は，道士の着る道袍と同じような形で，色は紅を基調として，膝から下が青，袖口は黄色，襟と腰の部分に黒布があしらわれたもの。頭には黒いネットを被り，後ろに写真１のような飾りをつけている。法師たちは時計と反対回りにステップを踏みながら位置を少しずつ移動し，ひとしきり経文を朗誦した後，高功は三本の香を手にし祖師像に拜する。次に死者の長男にも同じように三拜させた後，法師全員一礼して退場する。

②「拜飯」死者に食事の接待をする儀礼である。法師は死者の遺影の置かれた霊壇の前に立ち，鈴を鳴らしながら「佛九泉使者引魂来」と書かれた引魂幡を大きく何度も振る。そしてその後ろに控えた三人の息子たちにそれぞれ三本の香，飯茶碗，元宝[11]をもたせ，死者に供する。夜６時頃終了。この後は，法師，遺族共に夕食を取るため休憩する。

③「起壇」夜７時，夕食を終えて儀礼の再開を知らせるため，打排子を行う。

④「成服」孝子が喪に服すことを象徴的に示す「按麻戴孝」の儀礼。法師は鈴と幡を振りながら霊壇の前に立ち，孝子に三拜させ，法壇の前にもどって孝疏を読み上げる。孝疏は死者の名前，住所，生年月日，陽寿，孝子の名前等を記したものである。それから舅父は，先ほど述べた孝帽と40センチ弱の緑色の竹に赤い布を被せた孝杖を，「日吉時良，天地開張，舅父賜杖，富貴万年」と唱えながら息子たちに手渡す。その後東西南北の天地父母[12]を拜し，霊前に跪いて三拜する。

⑤「発関」関文を宣読する儀礼。まず五人の法師が登場し，『黄関追魂往科』を朗誦する。高功は响仗，右壇は木魚，左壇は响板，後ろは大鈸，揺鈴を手にしている。孝子が三本の香を祖師像に奉じ，その後高功が封に入った関文を読み上げる。

⑥「做水懺」紅袍を着た法師が法壇の前に座り，『観音宝懺』を読む。楽器は低胡と小鈸が使用される。「水懺」とは，死者が生前に犯した罪を井，

河，海，渓の紙に懺悔する意味であるという。

⑦「懺霊」死者の霊魂を招き，慰める儀礼。まず黒袍を着た一人の法師が引魂幡と揺鈴を持ち，霊壇の前に立ち，その後ろに孝子が跪く。法師は孝疏を宣読し，三本の香を持ち，神仏に請い，招霊を行う。次に告霊といって，法師は，男性の場合は『十大英雄』，女性の場合は『十懐胎経』を，残された子や孫に親の恩を語り聞かせるように，哀感を帯びた調子で唱う。唱が終わると，敬茶，敬酒，敬飯を行い，死者の霊魂をもてなす。

⑧「点字」位牌の開光儀礼。孝子は死者の長男を先頭に霊壇の前に一列に並び，跪く。長男は手を後ろに回し位牌を背中に背負うように持つ。舅父は黒い墨をひたした筆で，長男の背中に背負われた位牌に点を打つ。この点字によって位牌に霊魂が宿ったとされる。

⑨〈沐浴〉招来した霊を洗い清め，更衣させる儀礼。霊壇に向かって右側に沐浴亭を設置する（写真２）。沐浴亭の両隣に置かれたのは男僮と

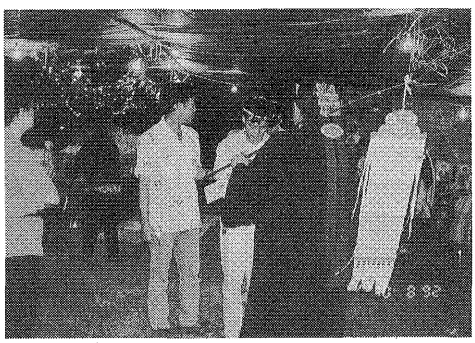

写真１

女婢の紙の人形，前面には手ぬぐいと湯を浮かべた洗面器を置く。黒袍を着た法師が引魂幡と揺鈴を持ち，告霊の時と同じように母親の生前の苦労を唱いあげた後，杯[13]を投げる。「勝杯」が出れば，長男の嫁が位牌を持ち，沐浴亭の中に入れる。その時法師は二本の香を両手に持ち，手をくるくると交差させるようにして最後に洗面器の湯の中に落とす。これを三回繰り返すが，三度目は香を十字に交差させる。この後，長男の嫁が手ぬぐいで位牌を拭く真似を三回繰り返し，紙衣を地面に広げて見せ，これを焼く。だいたい夜11時30分頃終了。

⑩「做懺」午前零時に打排子を行った後，午前１時20分頃から法師による読経を再開する。紅袍を着た法師が法壇の前に座り，小鈸と鼓でリズムを取りながら，男性の場合は『金剛経』，女性の場合は『血盆真経』を朗誦する。だいたい一時間程度で終了。

⑪「過橋」奈河七洲宝大橋を渡り，霊魂を西方浄土に導く儀礼。ここでは引魂官に扮する黒袍の法師と，土地公や橋守に扮する太鼓担当の楽師との間で，長い対話が交わされる。この対話の内容が，福佬人の冥界観の一端を知る資料となると思われるので，次節では，この〈過橋〉の内容を詳しく紹介したい[14]。

５．「過橋」の儀礼

午前３時30分頃から，儀礼空間の設営を始める。まず法壇と霊壇の間の空間に白布を敷き，その上に黒胡麻を用いて，「奈河七洲寶橋」という太い文字を描く。白布の回りには蠟燭を点す。（写真３）午前４時儀礼開始。

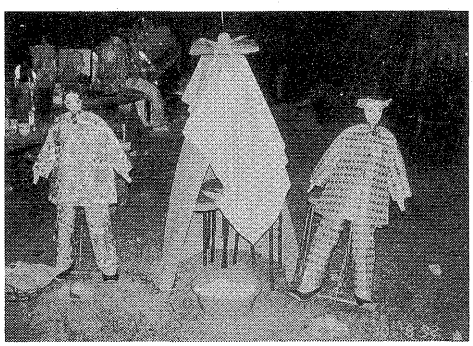

写真２

引魂官に扮する黒袍の法師が引魂幡を掲げ，大鈸を打ち鳴らして登場，「阿弥陀佛」と唱えながら三宝と諸佛に拝し，神主牌を捧げ持つ長男を先頭に一列に控えた孝子にも三拝させた後，孝疏を宣読する（写真１）。

写真 3

それから引魂官は孝子を引き連れ，奈河七洲大宝橋の回りをゆっくりと唱いながら三周する。引魂官の唱の内容は聞き取れない部分が多いがおおよその内容は次の通り。

時雖不是聖賢之徒
但也不是什么十悪不赦之徒
拍反的是一位賢妻良母
含辛茹苦，任労任怨，養大了幾個仔女
没有功労也有苦労…請求閻君根拠実情
不要壊她的霊魂去地獄受苦
希望能譲她的霊魂早日超昇…

奈河七洲大宝橋の回りを回ってきた引魂官と孝子の一行は，法壇の前で止まる。そして土地公に扮する大鼓担当の楽師と対話を開始する。

引魂官：もしやもしや土地公公。

土地公公：これはこれは，どこから来られた，何用でございるか，何処へ行きなさる？

引：私は東土から参りました引魂官，ここにおりますｘｘの霊魂を西方へ帰するところ。ここに至りまして，目の前にある三つの大山，名前は何というのか，公公に教えていただきたい。

土：貴殿の前にある三つの山，左手金色のは金山，右手白っぽいのは銀山，真ん中のまばゆいばかりのあのお山，庫銭山[15]とは正にこの山のことでございる。

引：庫銭山の名はどのように起こったのでございろうか？

土：庫銭山とは男の子を生めば孝行して功徳を積み，女の子を生めば嫁に行って庫銭を塡し，こうして庫銭山を築くのでございる。

引：庫銭山の上の四本の道はどこに通じているのでございるか？

土：庫銭山の四本の道は，豪華絢爛と天堂に往き，明々白々十王をめぐり，黒々暗々と地獄に向かい，うねうねと血湖に往く。

引：山の下に河が有り，河水が清清と逆流しておりますが，あれは何という河でございるか？

土：逆水河と申す。

引：逆水河の名はどのように起こったのでございろうか？

土：逆水河は，そもそも漢朝の時，王昭君娘娘[16]という者あり，奸に遭って迫害され，蕃王に嫁ぐことになったが，半路のところで，番王に従うのを本意とせず，自ら河に身を投げたのでございる。天はこれをとがめず，節烈の女とし，その玉体を浮き上がらせ，中国に帰してやったのでございる。故に漢王は後々にこの河を逆水河と改名したのでございる。

引：あの，枝はあるが葉の無い樹は何という名でございろうか？

土：無憂平正樹[17]と申す。

引：無憂平正樹の名はどのように起こったのでございろうか？

土：無憂平正樹とは，宋朝は包公[18]の植えたもの。もし官となり貴を成した者は，死んだ後ここを通る時は，烏紗帽と…（不明）の上着を掛けて神妙に裁きを待ち，もし商売人であれば，死んだ後ここを通る時は，そろばん，秤，帳簿などを掛けて神妙に裁きを待ち，もし乞食であれば，死んだ後ここを通る時は，破れた廉，破れた筵を掛けて神妙に裁きを待たねばならぬ。故に無憂平正樹と申す。

引：おお，平正樹とは“拍”平正（神妙にする）ということでございるな。

土：さよう。

引：樹の上に雀がおりますな。子雀が虫をつかまえて母雀に与えておりますな。あれは何という雀でございるか？

土：鴉雀と申す。

引：子雀が虫をつかまえて母雀に与えておるのはなぜでござるか？

土：鴉雀は生まれると母雀が虫をつかまえて子雀に与えてやり，後々に母雀が年老いて食べていけなくなると，大きくなった子雀が母雀に餌を与えてやるのでござる。しからばこれを母の恩に報いると申す。

引：雀さえも母の恩に報いるのでござるか。

土：さよう。

引：樹の下に子羊がおりますな。二本の前足で跪いて母羊の乳を飲んでおりますな。羊も孝の心がわかるのでござるか。

土：天下の百獣のうち第一の孝は羊でござる。子羊は，生まれると前足で地に跪まづかずして母羊の乳を飲もうとせぬ。古人曰く，“羊は跪乳の恩，鴉は反哺の義”と。

引：おお，“羊は跪乳の恩，鴉は反哺の義”でござるか。かたじけない土地公公。霊魂よ霊魂，よくわかったぞ。これからゆっくりと西方へと旅立とうぞ。

引魂官は再び孝子を引き連れ，奈河七洲大宝橋の回りをゆっくりと唱いながら二周する。周り終わると，今度は橋神に扮する楽師の前にもどり，対話を再開する。

引：霊魂よ，霊魂…前方にあるのは三つの橋，橋の名前は何というのでござろうか。橋神公公に尋ねてみよう。もしやもしや橋神公公。

橋：これはこれは，どこから来られた，何用でござるか，これからどこへ行きなさる？

引：私は東土から参りました引魂官。ｘｘの霊魂を西方に帰するところ。前にあります三つの橋。名前は何というのでござろうか，ちょっと公公にお尋ねしたい。

橋：前方の三つの橋についてお尋ねでござるな。左手の金色のは金橋，右手の白っぽいのは銀橋と申す。真ん中の色鮮やかな欄干の橋が奈河七洲大宝橋でござる。

引：金橋の上の橋守は何者でござるか？

橋：唐明皇[19]が金橋の橋守でござる。

引：銀橋の上の橋守は何者でござるか？

橋：魏徴丞相[20]が銀橋の橋守でござる。

引：奈河七洲大宝橋の橋のたもとにいるご婦人は何者でござるか？

橋：劉氏孫二娘と申す。

引：劉氏孫二娘はいったいどうして奈河七洲大宝橋の橋守をしているのでござるか？

橋：劉氏孫二娘は生きている時は行状よく，斎を食し，佛を拜し，死んだ後に閻君の取り調べを受けたところ，陽間での行いよろしいとのことで，こうして奈河七洲大宝橋の橋守を命じられたのでござる。

引：金橋の下の，あの裸の，橋の下で魚や海老に餌をやり，苦刑を受けているあの婦人は何者でござるか。

橋：あのご婦人は厳氏孫大娘でござる。

引：厳氏はどうして橋の下で魚に餌をやり，苦刑を受けなければならないのでござるか。

橋：厳氏孫大娘は悪事を積み重ね，人が窮するのを笑い，人が富むのを嫌い，人がかせいだ金で新しい家を建てるのを妬んだために，人を害することはなはだしく，死後閻君の命で橋の下に突き落とされ，魚に餌をやり苦刑を受けることとなった次第。

引：銀橋の下にいる，裸の，大きな鋸で身二つに切られようとしている，あの男は陽間で何をやったのでござるか。

橋：あの男は陽間で陰間に悪利を積んだのでござる。小斗貸して大斗，一担貸して二担を絞り取る[21]，人の利息を食むことはなはだしく，死後閻君の取り調べを受けて，橋の下に突き落とされ，大鋸で切り刻まれてから，陽間に行って罪を償うこととなった次第。

引：奈河七洲大宝橋の下の，裸で，ぐらぐらの油鍋にほうりこまれているあのご婦人は陽間で何をしたのでござるか。

橋：あのご婦人は陽間で媒人（仲人）をしていたのでござる。

引：何ですと？

橋：媒人でござる。
引：おお媒人でござるか。死んでから煮え滾った油鍋で煮られるとはまたいかに？
橋：もともと媒人をするのは良い事。古人も“天頂に雲が無ければ雨は降らず，地下に媒人が無ければ婚成らず”と申す。しかし売名のために媒人をやり，人の財産を騙し，人の結婚を邪魔建てするのは，人を騙すことはなはだしく，人を害することはなはだしい。これによって閻君の取り調べるところとなり，橋の下に突き落とされてぐらぐらの油鍋にほうりこまれ，鬼干にさせられるところでござる。
引：ひどいことだ，それは媒人ではなくて，結婚詐欺ではござらぬか。
橋：さよう。
引：公公，奈河七洲大宝橋の橋の上にいるあの二人は何者でござるか？
橋：牛頭馬面橋門大将軍と申す。
引：おお，牛頭馬面橋門大将軍と申されるか。かたじけない公公，霊魂よ霊魂，よくわかったぞ，これから西方へ旅立とうぞ。

太鼓と大鑼が鳴らされる。

引：三更であるぞ，橋のたもとの門が開くぞ。十殿の閻君が審問に来られるぞ…

引魂官，引魂幡を高く振り，楽師との対話を再開する。

引：もしやもしや橋門将軍。
橋門将軍：これはこれは，どこから来られた，何用でござる，これからどこへ行きなさる？
引：私は東土から参りました引魂官。ｘｘの霊魂を引き連れて西方へ帰する途中，奈河七洲大宝橋を通らなければなりませぬ。ここは橋門将軍にぜひとも無事に渡らせていただきたい。
将：何か証明書はあるか。
引：老君[22]の文牒がございます。
将：老君の証明した文牒があるのか，わしに見せよ―よろしい，確かに老君の文牒である。橋門を開けるから，はやく橋を渡られよ。

引魂官の唱
引：白布白金金，
…
霊魂超昇好積徳
霊魂過橋見観音
…
霊魂再生好積徳
霊魂過橋拜観音
霊魂呀霊魂
霊魂呀你快快過此江

引魂官は遺族を先導し，真ん中の奈河七洲大宝橋を渡る。その際，コインや10ドル紙幣を落としていく[23]。奈河七洲大宝橋を十回渡り，すべての儀礼は終了する。

6．小　結

フランスの道教学者シッペール氏は，台湾南部の道教式功徳儀礼の構造について，５世紀の初めに確立した黄籙斎の儀礼形式を中心的な枠組みとし，この形式が宋代以降民間に流布していく過程で，霊魂の救済と清めを目的とした，演劇的，即興的要素の強い「鍊度」の儀礼が付け加えられ，様々なヴァリエーションを生み出してきたと述べている。「鍊度」の部分は，「打城」で始まり，「塡庫」，「十月懐胎」を経て，「煉度」芝居（目蓮戯）で頂点に達し，「過奈河橋」で終わる[24]。すなわち，枉死城や血盆城に閉じ込められた霊魂を救いだし，沐浴で清めた後，霊魂は再び冥界をさまよい，最後に奈河橋を渡るという筋書きである。

仏格を祀る福佬人の功徳儀礼も，道教式儀礼とさして変わらない構造をもつ。「打城」は行われないが，「招霊」で霊魂を招き，「懺霊」で「十懐胎経」を唱い，「沐浴」，「過橋」と続く後半部分が，シッペール氏の言うところの「鍊度」に相当する

と見ることができる。

その後半部分で重要な位置を占める「過橋」は，目蓮という名称こそ使われていないが，引魂官と土地公，橋神との対話で構成されたその形式から見て，目蓮戯の一つのバージョンと見てさしつかえないだろう。潮州人の功徳儀礼における「過橋」では，福佬人の「過橋」と非常によく似た内容の対話を，目蓮尊者と地獄の官吏の二人で行う。福佬人集団の引魂官に相当するのが目蓮尊者である。

福佬人集団の「過橋」が本来どれだけの長さのもので，今回収録することのできた部分が全体の中でどのような位置を占めているのかについては，他に資料がないため憶測の域を出ないが，台湾の煉度芝居のアウトライン[25]を見るかぎり，今回収録できた部分は，目蓮が霊魂を引導して冥界をめぐり，最後に奈河橋を渡る際に目の当たりにした，冥界の情景であるといってよいだろう。そこに描写されている情景とは，たとえば，金山銀山，庫銭山，逆水河といった地獄の名所であり，また生きている時の行状によって責め苦を受ける人間たちの姿である。「過橋」ではその情景の描写を，一人の人物が尋ね，もう一方が答えるという形で進行させていく。

「過橋」で交わされるやりとりの細部―たとえば劉氏孫二娘という人名など―がどれほどの地方性をもつものなのかは，今後，福佬人集団だけでなく，台湾で行われている功徳芝居の内容と比較することが必要となる。また福佬人の功徳の系統を明らかにするには，言語的，文化的に近い潮州の功徳儀礼との比較，さらにカナダの人類学者ディーン氏らによって明らかにされつつある福建南部沿海地域との比較も当然必要となってくるが[26]，これらの問題については，今後の課題としたい。

注

1．1992年5月から1993年8月まで，香港中文大学に留学中の期間。

2．ここでいうエスニック・グループとは，漢族という民族範疇の下位にある出身・方言を同じくする人々の集団をさして用いる。

3．筆者が出会った「喃嘸佬」たちと殯儀館の職員からの聞き書きによる。新界農村で，醮などの道教儀礼を担当する正一派の道士が，喪葬儀礼にどれほど関与するのかについては，確かな情報が得られなかった。

4．たとえば扶乩を行う民衆道教教団では，位牌や骨壺を安置するロッカー式の位牌堂，納骨堂を設け，功徳儀礼とセットにして，低価格で提供している所が多い。

5．田仲一成『中国祭祀演劇研究』東京大学出版会，1981年，698-699頁。

6．詳細なものとしては，大淵氏による長州島北帝廟の太平清醮の儀礼の調査報告がある。大淵忍爾前掲書，786-819頁。儀礼担当は魏氏広徳祖壇。

7．海陸豊方言で演唱される戯曲。詳細は，田仲一成前掲書，697頁。

8．別の法師の説によれば，左から，観音娘娘，普賢菩薩，釈迦牟仁，文珠菩薩，三奶娘娘であるという。

9．1993年7月16日から17日にかけて，鑽石山殯義館で行われた水上居民の男性65歳の功徳儀礼は，次のような順序で行われた。1．発関　2．成服　3．水懺『観音宝懺』　4．唱曲　5．点字　6．懺霊『十大英雄』　7．做懺『金剛経』　8．過橋

10．楽師が儀礼の合間に奏する音楽で，嗩吶，大鑼，大鈸を打ち鳴らす派手なもの。

11．紙銭の一種。

12．福佬人が敬奉する神格で，福佬人の建造した廟にはたいてい，この天地父母が祀られている。

13．三日月形の一対の小さな板でできており，これを投げて神意を占う。台湾のポエに相当する。「勝杯」は床に落ちた一対の板が表裏を見せること。

14．筆者は海陸豊方言を解さないため，10月8日の「過橋」儀礼をすべてテープに録音し，後に海陸豊出身者数人に漢字でのトランスクリ

プションを依頼した。本稿の資料は，このトランスクリプションに基づいて，できるだけ忠実に訳したものである。

15. 庫銭とは天上の庫に収めなければならない亡者の借金。そのため功徳の際，近親者はおびただしい金紙銀紙の紙銭を舟形に折り，紙の金庫にぎっしりと詰め，これを焼く。庫銭山とはこのような銭が積もってできた山のこと。
16. 漢代の女官。匈奴に無理やり嫁がされ，川に身を投げて自殺したと伝えられる。
17. 榕樹のこと。広東地方では，榕樹は，その葉を辟邪に用いたり，枝に紙符を結び付けたりする樹木崇拝の対象である。土地公も樹の下に築かれることが多い。
18. 清廉潔白で知られる宋代の役人。裁判劇に登場し，幽明界を行き来して事件を解決する。
19. 唐玄宗。
20. 唐太宗に仕えた名臣。
21. 高い利息を意味する慣用表現。一担＝四斗。
22. 太上老君，すなわち老子のこと。
23. 落とした紙幣や硬貨は，遺族および参列者が後で持ち帰るが，その日に使った方がいいとされている。奈河七洲大宝橋の文字を描いた胡麻は米櫃の中に入れておくと縁起がよいという。
24. SCHIPPER, Kristofer, "Mu-Lian Plays in Taoist Liturgical Context", David Johnson ed., *Ritual Opera Operatic Ritual*: "*Mu-Lian Rescues His Mother*" *in Chinese Popular Culture*, The Chinese Popular Culture Project, University of California, 1989.
25. たとえば，SCHIPPER 上掲論文の147頁には，シッペール氏が台湾南部で収集した目蓮戯関係のテキストがリストアップされているが，その中の一つ煉度芝居の完全版テキストは次のような内容を含むという。
    煉度科（1960）
    (1)二人の道教の聖人，正一真人と掌教先生の冥界入りと隔郷亭までの旅
    (2)問答を伴った「二十四孝」
    (3)「節義」
    (4)二人の聖人の隔郷亭から奈河橋を渡るまでの旅
    付録　即興的に挿入される短い目蓮戯「挑経科」
26. たとえば，DEAN, Keneth, "Funerals in Fujian," *Cahiers d' Extreme-Asie* 4，1988を参照せよ。

新刊紹介

諏訪春雄著

『日中比較芸能史』

近年の中国民俗学の大きな研究分野の一つは儺文化，悪鬼払いの仮面儀礼の総合的研究である。国際シンポジウムもすでに8回開かれ，関係著作は数十冊にのぼる。このような動向の中，中国に儺戯を実地に尋ね，そこに日本の民間神楽や能・狂言・歌舞伎の源流を見出だし，定説化されている折口，柳田などの芸能史研究に新たな検討と批判を加えたものが本書である。内容は日中比較芸能史から見えてくるものを序とし，「季節に来訪する神－まれびと論・異人論批判－」，「蓑笠と杖の民俗－日中の田遊び－」，「翁と三番叟－芸能における来訪神の系譜－」，「六方・反閉・禹歩－顕現した神の足取り－」，「日中韓の仮面劇」，「日本の神楽と中国の民間祭祀」，「中世神楽の形成」，「地獄住来から地獄破りへ－打城戯・通関・目連戯－」，「本地物と人神－中国三層宇宙観と日本の中世的世界像－」，「日本祭祀の構造－道教・別祭・花祭り－」，「三信遠花祭りの基本構造」，「芸能の故郷－日中憑霊信仰の比較－」，「日中舞台の類同性」，「定式幕の誕生－五方五色観念の変遷－」の14章で自説が展開される。刺激に満ちた書である。

（佐野賢治）

A5判　360頁　索引12頁　吉川弘文館
1994. 1月刊　8,000円